Theater Association of KANAGAWA TAK

DRAMA かながわ

NO.94

Theater Association of Kanagawa　March 2025

2024年度 神奈川県演劇連盟合同公演「ヨコハマ・マイス YOKOHAMA MICE」
第22回かながわ演劇博覧会／令和6年度 神奈川県演劇フェスティバル／資料室だより ほか

2024年度 一般社団法人 神奈川県演劇連盟合同公演

『ヨコハマ・マイス YOKOHAMA MICE』

2025年3月21日(金)～23日(日)　神奈川県立青少年センター1階 紅葉坂ホール

【総評】中山朋文（theater 045 syndicate）

昨年度に引き続き、合同公演の演出をさせていただきました。この合同公演は、加盟する団体が、垣根を越えて共に芝居作りをする公演です。

ドリル饅頭の中西広和氏が脚本を担当し、加盟団体からは劇団820製作所、Theater Company 夜明け、そして個人会員が出演者として参加してくださいました。外部からの参加者を含め総勢18名のキャストに加え、当日ゲストとしてまりこ☆みゅーじあむ、劇団年輪、演劇プロデュース『螺旋階段』、劇団河童座が出演する大所帯の座組となりました。

前回から引き続き出演してくれたキャストも多く、年齢層は10代から60代までと幅広く、特に20代～30代前半のキャストが多い活気ある稽古場となりました。

今回の作品「ヨコハマ・マイス」は、横浜の路地裏に暮らすネズミの家族が、他の種類のネズミとの軋轢や、天敵である大ガラスの襲撃など、多くの困難を家族が互いに助け合って乗り越えていく、という単純明快なストーリーです。

中西氏の書く本はストレートで力強く、本人も仰っているように昭和のTVドラマや1960年代の日本映画黄金期の作品のような世界観が特色です。セリフはシンプルでリズムが良く、泥臭く活気のあるやり取りは、激しく明るく、時にもの悲しい。役者もこのセリフを読んでいると、自然と気持ちが滾ってくるし、稽古を重ねるたびに関係性が濃密になっていきました。人物描写（まあネズミですが）や物語の設定は荒唐無稽に見えながら、道徳や普遍的な美意識に根付いています。役者にとって演じていてこんなに楽しいことはないと思います。

劇中の音楽は昭和の歌謡曲風のオリジナル曲を多数使用し、ダンスシーンも散りばめ、ダイナミックさと楽しさを加えました。

スタッフワークについても、音響・照明・美術・演出部とも信頼できるプロフェッショナルばかりで、私の細かいきっかけや手間のかかる演出プランに逐一応えていただき、完成度の高い劇空間になりました。

2年連続して合同公演の演出を担当させていただいたことで、紅葉坂ホールの特性を体得できました。昨年度の合同公演の反省点を踏まえ、盆機構の有効活用や広い空間の使い方など、より効果的な演出をすることができたと思います。

合同公演は様々な経歴やライフスタイルを持った方々が集う公演です。そのため稽古に全員が参加することは難しく、総稽古時間を確保するために、長い期間を要します。今回も昨年同様、9月からワークショップ形式の稽古から始め、特に本作の台本読解に力を入れました。今回の合同公演は、第一稿が昨年夏には出来上がっていたことが創作においてとても大きく、役者たちの台本への取り組みをより深くすることができました。

ストーリーがシンプルであるが故、それがリアリティある言葉として発話し、さらにエンターテインメントたらしめるためには役者の技量と熱量が必要になります。

役者陣には演出である私からの指示を待つのではなく、自ら稽古場で発信してほしいと伝えました。少ない稽古時間を有効に使うため、「稽古場はプレゼンテーションの場」であることを共通認識として持ちました。個々の差はあるものの、この認識を持つことでそれぞれの役に対する責任感と愛着が生まれ、稽古場はとても和やかでありながら熱気にあふれる場となりました。

このようにキャスト・スタッフが一丸となり、「ヨコハマ・マイス」は合同公演として、かつてないスケールの作品になりました。SNS上での評判も良く、アンケートの回収率も大変よく、大人から子供まで楽しめる作品として好評をいただきました。

しかしながら紅葉坂ホールの客席を埋めるのは難しく、今回も観客動員には苦戦しました。合同公演開催にあたってマグカルや県文化課との連携をより強くする、地域の中高生を劇場に呼び込むなどの試みが必要と感じました。

来年度は2025年12月に開催されます。すでに脚本を担当したいという加盟団体が名乗りを挙げています。神奈川県演劇連盟合同公演はさらなる盛り上がりを見せていきます。

次回作もぜひお楽しみに！

参加者の声

所属する劇団かに座以外での舞台は初めてでした。稽古中、初めて演じる役柄に、自分の中での常識や持っていたものがほとんど通用せず、スケジュール的にも大変で、精神的にも体力的にも辛い瞬間が多かったです。何度も心が折れかけましたが、なんとか持ち堪えられたのは、皆さんの作品作りに対する情熱と面白さを追求する姿に感化されたことや、与えられたナイフという役が大好きだったからです。そして一番大きかったのは、歳の近い頼れる仲間がいてくれたことです。一緒に悩んで、話し合って、飯食ったことは一生忘れません。

今回、僕が楽しめるようになったのは実は本番初日を迎えてからでした。非日常的な髪型と衣装を身に纏い、素晴らしいステージに立たせていただいた高揚感と、お客様の反応を見て、良い作品を見せられたという安堵もあったと思います。

不思議なもので、今までで一番大変だったはずなのに、終わってみると「今までの何よりも愉しかった」という思いが溢れ出て来ます。写真や動画もこれまでにないくらい見返しました。きっとまだ、僕はこの舞台の興奮がおさまっていないでしょう。

憧れの役者さんと共演できたこと。素晴らしい演出や先生、スタッフ陣に囲まれたこと。かけがえのない仲間と出会えたこと。自分の視野が広がったこと。僕の役者人生のターニングポイントはここだと思える貴重な体験をさせていただきました。またいつかこの座組の方々と関われる事と、合同公演というものがこの先も続いていく事を心から願っています。

最高に幸せでした！！！ありがとうございました！！！

文：馬場大希（劇団かに座）

黒の軍団 ナイフ役：馬場大希

劇評　2024年度 一般社団法人 神奈川県演劇連盟合同公演『ヨコハマ・マイス YOKOHAMA MICE』

2024年度一般社団法人神奈川県演劇連盟合同公演「ヨコハマ・マイス」の23日(日)の千穐楽を観た。

まず、会場へ入ると、先日お亡くなりになったいしだあゆみの「ブルーライト・ヨコハマ」の客入れの音楽が流れていた。これは元々の予定なのか、時をみての演出なのかなどと思いながら、ヨコハマの世界に誘われた。

舞台はネズミの世界を意識してか、全編を通して、パー明かりのない薄暗い照明の中、薄汚れたネズミ世界を感じさせるものであった。

ストーリーは、ロマン溢れる横濱馬車道の路地裏。平和に暮らす日本固有種の赤ネズミに、大ガラスに操られる外来種の黒ネズミ軍団の襲来。ラストは赤・黒・力合わせて大ガラス黒富士に打ち勝つという、作者の言うように単純で、何故か昭和のやくざ映画の匂いがする分かり易いストーリーで、私には楽しめた。ネズミたちの家族愛の強さを基盤に描かれた作品は、家族愛を超え、今のご時勢世界愛を感じるものだった。その作者の意図は充分に伝わっていた。

舞台は印象的なシーンが多かった。大ガラス「黒富士」に見立てた2本の赤いバックサスは面白く効果的だった。小麦粉を吹き散らしながらのシーンは面白く、小麦粉がスモーク効果を出せるんだと、思わずほくそ笑んでしまった。集団のパフォーマンスや盆の使い方、等々・・・。

特にラストシーンに向かっての立て込み方、昭和を意識してかの、最近見ることのできなくなった紙吹雪など、力強くも遊び心のある演出力の確かさを感じた。そして、それを支える照明・音響・舞台・衣装など、スタッフワークの確かさも感じた。

演者も広い舞台を駆けずり回り、熱気を帯びた熱演は観客にまで届いていた。

強いて言えば、大声で叫び、怒鳴り合うシーンが多かったのだが、台詞が聞き取りにくくキーワードがわからなくなることが気になった。

そして、やはり大きな問題は集客力の弱さか。多くの観客に囲まれた中でこの芝居が行われていれば・・・。とても勿体無い気がした。

それでも、人類（ネズミ？）皆兄弟を感じさせる「ヨコハマ・マイス」は、新生一般社団法人神奈川演劇連盟の未来を感じさせるような、合同公演だった。

文：横田和弘（劇団河童座）

第22回かながわ演劇博覧会

2025年3月7日(金)・8日(土)・9日(日)　神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

【総評】穂村一彦（劇団「無題」）

第22回かながわ演劇博覧会に多くのお客様にお越しいただき、また多くの演劇団体に参加していただいたことを大変嬉しく思います。3日間で12団体による24公演という非常に多くの公演が行われ、おかげさまで大盛況となりました。

思い返せば5年前、世界中を突然襲ったコロナ禍。演劇界も大きなダメージを受けることとなりました。当時は未知のウイルスという印象が強く、演博実行委員会の対応もバタバタしたものとなってしまいました。第17回演博は開催中止とし、同時期の他団体の公演も次々と中止になっていき、先の見えない状況に戦々恐々とする毎日でした。

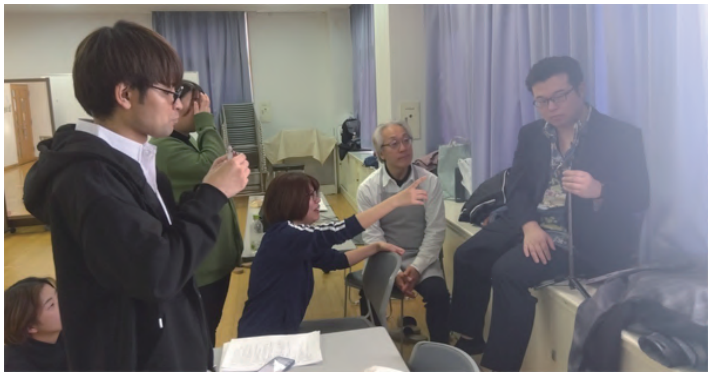
その後、試行錯誤をしてどうにか演博を続けられないかと道を模索してきました。客数制限や事前予約制。手指の消毒、換気、検温チェックなど。演劇の灯を決して絶やさぬようにとの想いでした。

そして今、ようやく「事前予約なし」「途中入退場可」「公演後の役者たちによるお客様のお見送りができる」という形で演博を開催できたことは、大きな進歩だと考えます。

演劇は劇団だけではなくお客様との双方向コミュニケーションによって初めて生まれるものもあります。それもまた演劇の醍醐味の一つでしょう。交流スペースで公演後、役者さんたちとお客様たちが笑顔で語り合っているのを見て、とても嬉しくなりました。

数年前までは当たり前だった光景が、いかに大切で貴重なものだったかを思い知らされました。今までの苦労が報われた思いでした。

演博の狙いの一つに「公演団体と観客、双方から演劇の敷居を下げて、演劇の輪を広げたい」というものがあります。その一助になれたのではないかと思います。



今回、募集団体最大12枠というところに16団体という、とても多くの申込をいただきました。

抽選の結果どうしても落選団体を出さなければいけないのは心苦しいですが、申込数が増えるのは演博の認知度が上がっているようで嬉しいです。

例年のことですが今回もまたバラエティ豊かな公演が行われました。旗揚げ公演から老舗団体。ドタバタコメディ、生と死や性を見つめるシリアス劇など。各団体が自分達の「色」をいかんなく発揮した、とても面白いイベントとなりました。きっとお客様にも楽しんでいただけたと信じております。

このような演博を作り上げることができたのはご来場いただいたお客様、演博舞台スタッフの皆様、青少年センターの職員の皆様、そして参加劇団の皆様のご協力のおかげです。

この場を借りて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

劇評　第22回かながわ演劇博覧会 ①

■劇団「コウノトリ」『私もプロですから』

探偵事務所に依頼していた女性と探偵が会話する内容を荷物引き取りにきていたリサイクルショップの店員が聞いて大きな誤解をしてしまう。すれ違う会話を楽しめるところもあるのだがよくわからなくて見ている側が内容に置いてけぼりになっているように思う。探偵に依頼した内容もわかるようでわからない。リサイクルショップと探偵の繋がりもいまいち掴み切れない。何もわからないまま終わってしまった。上演時間も三十分弱と短かったのでもう少し舞台で説明できることがあったはず。プロとは何か？それを考えさせてくれます。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■演劇集団 +α『スタッフ狂乱!飛び交うDOGO!まさかのジョーダン!?デクノBOW!』

舞台の始まり方が面白く期待が膨らむ。転換のダンスや衣装、靴、髪型、小道具にもポップでかわいいこだわりを感じた。デザイン会社のチームが時間内に再提出を余儀なくされる設定を軸に話は進んでいく。裏切り者探しから各々の本音を挟みながら会話はぶつかり合うのだが、そこまでぶつかっていないように観え、感情移入の仕方が難しい。おそらく大半は犯人この中にいないと思いながら観ていたのではないだろうか。最後、一人になるシーンで何を観客に残したかったのか。そこが明確に伝わるとこの戯曲の持つ力がもっと発揮できたと思う。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■クェル・ペッパー『ゼウスのテンカン』

演出で脚本で出演で一人頑張る劇団の主宰の男が女優との二人芝居本番に向けての場当たりをしている様子を面白く描写している。小屋の舞台監督はあくまでもフラットでその様子を冷静に見守っている。会話一つ一つが面白く、演劇博覧会のスタッフブースをそのまま使用した演出も観ているものを惹きつけていた。演劇の裏側を知っていると面白く、知らなくても裏側はこんなにも馬鹿じゃないだろと思えて面白い。圧力だけではいつも権力者はひとりぼっちになる。そうなるべくしてなった最後、男が一人になっても舞台を成立させようとする姿をなぜか観ている側は応援したくなる。個々の役者の力を感じた。面白かった。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■いかだ演劇部『月と光の旅』

劇団820製作所の主宰：波田野淳紘氏が作・演出を担当。仄暗い舞台上には6脚の椅子。会場内にうっすらと聞こえる蝉の声。始まる前からどこか儚さや虚しさなども感じさせる独特な空気が漂う。演出の素晴らしさは言わずもがな、若さ溢れる出演者の演技力も圧巻だった。練り込まれたストーリーを身に纏い舞台上を心地よく泳ぐ演者達。とても爽快で清々しさに満ち溢れていました。人間の持つ可能性や想像力の尊さ。辛い事があっても笑い合える「青春」は柔らかく素敵な世界。【突っ走って良い。怖くなんかない。一人じゃないんだから。行こう。ずっと先まで】自然と涙が溢れる素晴らしい作品でした！

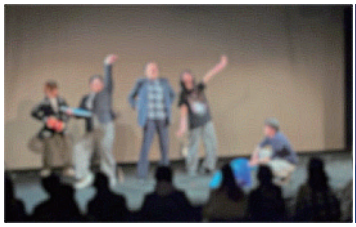
文：中西広和（ドリル饅頭）

■劇団「無題」『わんちゃん -One more chance-』

大金持ちの犬が亡くなり、偽霊媒師が騙そうとするところから始まるドタバタ劇。各キャラクター設定がしっかりとされていて観ているものを飽きさせないように工夫されている。本当に犬の幽霊がいたり、その犬に噛まれた泥棒が屋敷にいたりと突拍子もない設定を短い時間にまとめて落とし込んでいた。役者陣はしっかりと笑いどころを捉えて客席に笑いを届けていた。この戯曲に時代背景や人物設定をしっかりと定義し会話にできれば「ラン・フォー・ユア・ワイフ」のようなコメディに近づけていたかもしれない。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

■元気だけが取り柄『あくまくんは正義の味方』



正義の味方を名乗る五人組が、それぞれ際立ったキャラクター性を見せていた。「そんなやつはいない」というツッコミも吹き飛ばす、荒唐無稽上等のスタイルが頼もしい。にぎやかに演じられるなか、仕事にグッタリした社員の「いつも周りに助けられてばかりで、何もできないクズ」と自己評価を下すせりふにドキッとする。上司はとても親切だし、母親も心配を寄せてくれる、世界は温かいが、それでも死にたい。優しげな地獄の充満する現代に、刃をわが身に向けてしまう行き場のなさが切ない。俳優陣のカラダのキレと佇まいが魅力的だった。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

劇評　第22回かながわ演劇博覧会 ②

■演劇企画「肉球ダンサー」『今からお前がヒーローだ！』

やたらに輪郭が太いというか、味が濃いというか、層の厚い俳優たちが息をぴったりと合わせていきいきと跳ね回る。地方の遊園地で働くポンコツたち―うっかりダンディの吉澤、やらかし受付嬢の尾崎、適当くそ野郎の小島が、ヒーローショーの代役を務めることになり……という筋立てだが、50分のなかにものすごく緻密な関係性が描きこまれていて、えらく濃密な人間ドラマを堪能した。ささやかな変化、もしくは変わらなさをかみしめる終幕に、内なるポンコツが肯定される。小島を演じるジャイアント田村氏の、ひょうきんな悪役の弾けっぷりが楽しい。怪演、大好き！

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■劇団ペリートホームズ『水葬』

静寂の中に波音―緊張感の漂う幕開けに、カーテンコールなしのひっそりとした幕切れ。何かの弔いに臨むような、決然とした意志を感じさせる。母から苛烈な虐待を受けてきた17歳の少女ユキを保護するのは、かつて幼いわが子に手をあげてしまった女。都市の底で巡り会った二人の、それぞれの欠落が呼応する。物語の最後、海を前にして二人は身を寄せ合う。巨大な欠落を抱えながらも、人は人と温かさを分け合うことができる。未来はまだ薄暗く、何が待ち受けているかもわからない。それでも、あくまでも人間の向日性を信じようとする作家の手つきと俳優陣の奮闘に、救われる。

文：波田野淳紘（劇団820製作所）

■ヤニィーズ『イマジン～捜査の前に』

舞台中央に警察法第二条が大きく書かれた黒い幕が配置されている中、物語は始まる。闇バイトのおとり捜査の任務を任せられた捜査一課のベテラン女性刑事と特別捜査官の面談を軸に進む二人芝居だ。ビートルズの「イマジン」が劇中に使用されているため、観劇しながらも色々と想像し、ハラハラドキドキとしてしまう。バッドエンドも想像してしまったが、最後は舞台中央の警察法が描かれた黒幕をマントにし特別捜査官が女性刑事の家庭環境もハッピーエンドに導く。ネタ満載で笑いにあふれた素敵な舞台でした。

文：福本ぷう之介（プラスティックな月）

■赤ねく隊『聞こえますか～ミミミの耳は聴こえちゃう耳～』

飛沫を気にしてマスクをしながら前説をするシーンからスタートするが、実はマスク越しの前説ではなく録音を流してるというネタばらし。そしてその録音が、劇中では心の声として使用される。心の声が聞こえる主人公ミミミの苦悩とそこから起きる出来事が繰り広げられる。とにかく役者の皆さんがパワフルで、「若さあふれる舞台とはこういう事か！」と見ているこちらも元気になるような素敵な舞台でした。前説がエンディングに綺麗に繋がり、最後にはホロリと心地良い気持ちに。クスッと笑えて明日からも頑張れる気になりました。

文：福本ぷう之介（プラスティックな月）

■シアターあさぎり『明くる日の庭』

フライヤーより「やわらかくも明瞭な言葉遣いで、透明感のある作品世界を紡ぎます。誰もがどこかで経験したような葛藤を、しっとりと昇華させるような物語を目指します」との事。舞台は一貫教育の女子校、卒業制作に関わる生徒達と卒業制作の中心となる女生徒を巡る言葉に出来ない関係性を軸に話は進みます。明瞭な言葉遣いと謳っているだけあって、とにかく言葉が美しかった。美しいからこそ若さゆえの苦悩や不安定さが上手く表現されていたと感じました。舞台上の誰かしらに共感できたり、共感できなかったり、目の前で繰り広げられる青春というには野暮なくらいピカピカした物語でした。

文：福本ぷう之介（プラスティックな月）

■劇団横濱にゅうくりあ『横浜のブルースが聞こえてくる～女優たち2025』

控え室のような空間に女性が3人。「別れのブルース」を歌いながら物語は始まる。空気感は2025年でありながら、どっしりと昭和の空気が漂っている。劇団横濱にゅうくりあは1984年創立。そこから40年間、ヨコハマを舞台・テーマ・イメージしてきただけあって、とにかく熱いお芝居でした。3人の女性とそこに関わる男達が織りなす人間模様を、歌に乗せ繰り広げられる物語。役者の皆さんのパワーがストレートに届いて来て感動したのと同時に、40年間舞台を作り続けてきた劇団の凄みをひしひしと感じることができました。

文：福本ぷう之介（プラスティックな月）

令和6年度　神奈川県演劇フェスティバル 劇評

演劇プロデュース『螺旋階段』「幻の壁」

2024年12月20日(金)～22日(日) 小田原市生涯学習センターけやき ホール

螺旋階段の作品を見るのは2回目だが、小田原へ行くのは初めて。城下町の風情たっぷりの魅力的な駅周辺をうろうろと満喫して会場へ向かう。前回セットがすごかったので期待していたが、舞台には何もない。いやいや、きっと何かあるに違いないと期待しつつ、芝居は何もない空間から始まった。

冒頭から物語が佳境に入ったシーンから始まる。犯人を追う二人の刑事。共犯の女性。空間がゆがんだかのように、登場人物におかしなことが起きていく。同じシーンが繰り返され、犯人へたどり着かない。これは小説の中だと分かるが、明らかに状況がおかしい。そして彼らは自ら小説の世界から現実の世界へと抜けだす。小説を正しい方向へ進め、犯人を捕まえるために。

照明の光と共に登場人物は後ろの幕を突き破り舞台奥へ去る…目隠しから、次の場面では現実世界の探偵事務所が姿を現していてびっくり。セットが舞台奥から前方にせり出してきたようだ。やはりすごい、期待を裏切らない演出と仕掛けに目も心も奪われていく。

現実の世界では、いなくなった小説家を探して、編集者を名乗る女性が探偵の元に依頼に訪れる。螺旋階段の物語は小気味よくて難しい。ことばを巧みに操り、次を想像させ、納得させる気持ちよさがあるかと思えば、期待を裏切る斬新な展開へ。所々に出てくる小ネタにクスクス笑い、マニアックなアニメの話に同世代を感じてニヤニヤ。小説の登場人物と現実の登場人物が少しずつリンクしていくストーリー。ちょっと混乱しつつ、言葉の魔力にどっぷりハマって深読みしながら、頭をフル回転にする。ずるずるとこの世界に引きずり込まれていく。

物語は中盤から終盤へ。小説から飛び出してきた登場人物が探偵事務所へたどり着き、いなくなった小説家、問いかけられた疑問や謎がするすると解き明かされていく。消えた小説家の正体を予測しながら観ていたが、想像は裏切られ、そうだったのかと感心させられた。終焉に向かって現実での書きかけの小説も無事にエンドを迎える。一筋の光が見えてほろっとくるラストシーンにも抜かりがない。

物語を彩る役者達がまた素晴らしかった。個性豊かに舞台を盛り上げる三人の探偵、シリアスも小ネタも難なくこなす息ぴったりの二人の刑事。迷いと憂い、そしてプライドを隠し持った依頼人の女性、憎しみや恋心という繊細な心情を鮮やかに表現する共犯の女性。（犯人役は声だけのため割愛）物語を何倍にも深めてあっという間に時間が過ぎた。

タイトルの「幻の壁」は、小説と現実のはざまにある目に見えぬ境界線であり、それは時に人と人との間にも存在し、気付けば心にも巣食ってしまう。見えないだけに厄介でちょっとタチが悪い。しかしその壁はほんの少しの気遣いや優しさ、そして勇気があれば、この物語のようにきっといとも簡単に消えてくれる。その思いの大切さが心に沁みる作品だった。

文：倉田香菜子（劇団年輪）

Theater Company 夜明け「Eve」

2024年12月26日(木)～27日(金) 大倉山記念館ホール

舞台監督、そして照明で大変お世話になった木之枝棒太郎さんのご紹介で今回、音響オペレーターとして稽古後半で参加しました。12月の冬にぴったりの3つの短編ストーリーをオムニバス形式で上演。大倉山記念館ホールの舞台上、出入り口、客席を、余すことなく作品に沿った照明や舞台セットで彩り、電飾が星のきらめきのように天井や足元に飾られていた。また、本公演の一番の見どころは生演奏のピアノであり、劇中ほとんどの音源はピアノで演奏されています。入場料に見合わないくらい、とても豪華な公演であった。

作品1「黎明の少年」：「黎明（れいめい）」とは夜明け。新しい事柄が始まろうとすることを意味する。物語は、神奈川県庁に勤める1人の警備員が設計者である小尾嘉郎（おび・かろう）の友人として関わる、白昼夢から始まる。大正時代を思わせるような文学的なしゃべりとテンポ感がとても速く、場面転換と衣装を急いで着替える光景は、見応えがあり楽しいシーンだった。小尾嘉郎が浪人時代に恋をするお嬢様「けい」とのシーンは、誰もがキュンキュンするような甘酸っぱさと悲劇が詰まっていた。こんな青春のような恋を、私もしてみたいものです。未来という新たな黎明に向けて大正時代を駆け巡る、そんな2人の男女の夢と恋物語でした。

作品2「シュテルンツェルトの丘」：「シュテルンツェルト」とは、ドイツ語で星空という意味。戦争の時代を生きた、2人の兄弟の人生を描いた物語。とてもゆったりとした作品で、プラネタリウムを見ているような落ち着きがある作品であった。しかしその雰囲気とは裏腹に、物語後半は、戦争の残酷さや恐ろしさも見られる緊張感のある作品であった。戦争という激動の時代…。かつて星は、戦闘機の飛ぶ目安として利用され、戦争の道具として使われていた。星のような命が消えてなくなった悲しみを描く美しく、儚い、皮肉な運命を描いた作品。天国へ行く2人が去っていく姿は、幸福な人生であったのだと、あってほしいと望みました。役者の演技や表現力がとても素晴らしく、引き込まれるような泣ける演技と情熱的な輝きは、まるで星をみているかのようでした。

作品3「赤鼻のルドルフ」：世界的に有名なトナカイ、赤鼻のルドルフのお話。お話の場面転換時には、生演奏のピアノと合わせ「Silent Night（きよしこの夜）」を歌い、またオープニングのダンスはとてもファンシーかつかわいい振り付けであった。原作通りのお話であり、3人の親子がとてもかわいく、出演者が多く賑やかな舞台だった。ロバートの「The Christmas Song」を歌うシーンもあり、洋画を見ているような気分でした。絵本のように幸せを届ける、フィナーレにぴったりなお芝居でした。

「Theater Company 夜明け」は、2025年KAATで旗揚げ公演を予定しており、今回はその前夜祭としてとても素晴らしい始まりを見せてくれた公演だと感じました。次の舞台は、いったいどんな風景が見られるのか。とても楽しみな夜明けを待っております。

文：大狼羊

資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊
「名優が語る演技と人生」　（関容子 著／文藝春秋）

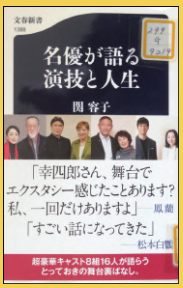
本書はエッセイストの関容子による舞台人や映画人たち8組の男女ペアによる対談集である。オープニングの仲代達矢VS岩下志麻では濡れ場話題に興味津々。仲代が若い頃、当時既に大物だった三船敏郎と共演し大ゲンカした話とか、「ここだけの話」が満載である。二番手の松本白鸚VS鳳蘭は舞台での共演がきっかけ。松本白鸚はミュージカルでも知られるが、その最初の舞台が越路吹雪との共演となる1965年の「王様と私」。弱冠22歳だ。これが「ラ・マンチャの男」へと続くことになる。記者発表で心配の声もあったが、越路吹雪は「染五郎（松本白鸚の旧名）さんなら大丈夫」と言い切った。稽古は始まっておらず、何を根拠にと当の本人さえ？？だったらしい。その後のミュージカルでは、宝塚の女優陣さらに対談相手の鳳蘭へつながる。鳳蘭は「風と共に去りぬ」では、レッド・バトラーの役に入り込むあまり、何と公演中に生理が止まってしまったという。宝塚後の「スウィーニィ・トッド」では、演技中にあばら骨を痛め、さらに本人も知らなかったのだが、実は妊娠していて公演中に流産。それでも休まなかったという・・。それをあっけらかんと語るんだから、凄まじい。

続いて、柄本明VS白石加代子という超個性派。「役者は他人が書いたことを言葉にするのが仕事。でも自分の体の中の歴史を通って言葉を吐き出すのがどうしてもできないことがある。すると演出家はもっと自然にと注文を付けてくる。「これって不条理では？」と語る柄本に対する白石の指摘が鋭い。「それって柄本さんの生れつき持ってる演技の質だね。」白石は5～6歳のころ母親から踊りを習ったのだが、その頃すでに身振りの中に情感を込める、という感覚を体感してそれが後の舞台に生きているのではと語っている。

小日向文世VS渡辺えりは、スティーブン・キング原作のホラー作品「ミザリー」での共演話が興味津々だ。渡辺は芝居の中で小日向の足を切り落とすのだが、それが夢の中でまざまざと出てきたという。怖いくらいの入れ込みだ。また、ゲネプロで長台詞が飛んで、延々とアドリブをかましたという。それが全部山形弁になっちゃった。一方、小日向も公演中にくしゃみをした弾みにセリフが飛んで、そのまま袖に引っ込んだら、舞監が台本広げて待っていたという。

他には、野村萬斎VS麻実れい、吉行和子VS小林薫、梶芽衣子VS西島秀俊、桐竹勘十郎VS寺島しのぶ、というラインアップになるのだが、続きはぜひ資料室で。我々、芝居に関わる者は演じる立場であるだけでなく、多くが舞台や映画のファンでもある。そして、感想やいろんな想いを仲間内で交換することも多い。ファンとして舞台やスクリーンから何かを発見し、あるいは気づかされそれが自分たちの糧になることもあるだろう。実際、筆者も対談のいくつかから改めて舞台に立つこと、さらに役者として生きることの意味に気づかされたことがあった。演劇資料室を訪れる皆さんにはぜひお勧めの一冊だ。

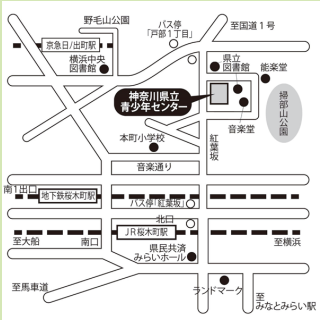
文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



宝塚きっての男役と梨園の大立者が若かりし頃に共演していたミュージカルでは、こんな破天荒な出来事が！
銀幕のスターと伝統芸能を背負う人間国宝のとっておきのエピソードなどなど。
超豪華な組み合わせで好評を博した『オール讀物』連載「名優　男×女」８対談を新書化。

演劇資料室

【開室時間】
平日（火曜～金曜）　13:00～22:00（貸出は21:30まで）
土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）
【休室日】
月曜、年末年始
※上記以外にも休室日がございます。
ホームページをご確認の上、お越しください。
〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-1
神奈川県立青少年センター2階　演劇資料室　電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』　■クェル・ペッパー　■京浜協同劇団　■劇団河童座　■劇団コピュラ　■劇団年輪
■劇団820製作所　■劇団「無題」　■劇団横濱にゅうくりあ　■Theater Company 夜明け　■theater 045 syndicate　■ドリル饅頭
■プラスティックな月　■まりこ☆みゅーじあむ　■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
■横浜小劇場（横浜演劇研究所附属）　■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 94号

[発行] 一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2025年3月31日）
[編集] オッスたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、中山朋文（theater 045 syndicate）
[ホームページ] https://kenenren.or.jp/

ホームページ